

文法(史的研究)

一 はじめに

今期を一望すると、先期の担当者の総括の言に見える研究動向の確実に進んでいることが知られる。すなわち、現代語研究・記述の方法をこの領域にも適用するもので、特に動詞の形態論と構文論に著しいが、その成果の一部は既に中等教育の教室にも流れこんでいる。『国文学解釈と鑑賞』(51-8)の特集「古典文法をみなおす」ではその実践者の稿を載せ、『日本語学』(5-4)も「古典文法を考へる」の特集を組んだ。わたしは、現在の小中学校の文法教育はほとんど無意味だと考えている(拙稿「文法教育再考」(広島女子大国文3))。わずかな有効性は高校での文語文法への導入にあるのだが、かかる文語文法の教育が進めば、当然小中学校の文法教育にも影響するはずで、なりゆきに興味もたれる。

そのほかに特に顕著な傾向は認められない。研究者それぞれが自分の課題を進めていったと見てよいだろう。以下の執筆にあたって、分類はおおまかと簡便をむねとした。自分の理解の及ぶもので、有益なもの、刺激的なものを中心に言及することにし、網羅主義はとらない。刊行年月は省略し、巻号は括弧内に「12-3」のように記

す。紙幅の節約のために傍点を多用し、敬称を省略する。何回か出現する次の四書は、矢印下の略称を用いる。

工藤力男

松村明教授国語研究論集「松村論集」

築島裕博士国語学論集「築島論集」

選脛記念国語学論集「宮地論集」

国文法講座1-6「講座 1-6」

二 助動詞

初めに総論ともいうべきものをとりあげる。

小松光三「古文解釈と助動詞」(「講座」2) 文法と解釈とはともに言語を対象として成立するが、文法は言語自体を対象とし、解釈は言語による表現を対象とする点で、根本的な違いがあり、しかも両者は不可分である。しかし、世上にはこの大前提を解しない人がある。助詞テに、順接条件と逆接条件という全く逆の意味が共存すると書く文法の記述がその典型で、助動詞ムの意味の婉曲も解釈の産物だと述べる。これは小松などの年来の主張だが、くりかえし発言せざるをえないところに、わが学界の病弊がある。小松はその主張をラシ、ナリで実践して見せる。彼の主張の全部に賛成するわけ

ではないが、かかる啓蒙的な書物で注意を促したことの意義は大きい。

小林芳規「幻の『来しかた』——古典文法の一問題——」〔汲古〕10）カ変・サ変両動詞には特殊な承接をする助動詞キ、そのカ変の承接において、キシは特定の連語に偏り、用例の少ない和歌では「住吉のきし、(岸)かた」と掛詞にのみ現われることを述べ、東寺所蔵の院政期書写資料に「過後」の抜書があり、その傍訓が平上濁上平の声点をもつこと、すなわちキジカタの訓を見つけた小林は、平仮名文献の「きしかた」が、じつは「来にしかた」の音便形無表記なのだ」と結論する。衝撃的な発言だが、和歌に音便形が用いられるのは俳諧歌のような特殊なばあいが一般で、掛詞とはいえ普通の和歌にそれを認めることは不安だし、スギシカタの誤点では、とわたしは考えていた。反論がさつそく出た。

こまつ ひでお「きしかた考——仮名文伝本の文献学的処理の方法——」〔国語国文〕56—6）こまつは、仮名文における撥音便無表記の古典的な例「ししこかほよかりき」が、じつは無条件でありえたものではないことを詳細に述べ、無表記にせよ仮名文の中に助動詞「ぬ」の音便形が導入された形跡は認められないとする。「きしかた」は、「ししかた」と共存すべき双形として形成された名詞であつて、助動詞キの接続関係を記述する対象から除外されると述べ、キジカタの声点も不審とする。近年のこまつの仕事は名人の手わざを思わせる円熟ぶりを示すが、本稿についても同様の感をいだいた。

漆崎正人「助動詞『うず』についての一考察——過去推定——として、用法をめぐって——」〔藤女子大学国文学雑誌〕36）天草版伊曾保物語の「一節」兼日申し合はせうずるしるしとして」は、従来の解釈では文

脈に破綻を生ずるが、それは、辞の文法的意味を固定的に捉えたためだとして、ロドリゲスの大文典を手がかりに、これが過去推量に当る意味を担うことを論証する。近代語に移る日本語の底流も抑えていておもしろいが、材料がキリシタン文献に偏る点があるのたりない。

大塚光信「シマウからシム」〔京都教育大学国文学会誌〕21）狂言や抄物に見える、尊敬の助動詞の一つと目されるシマウ・シモ・シメ・シムのたぐいについて、辞書の記述の混乱を指摘し、変遷のあらすじを描いたもの。著者の抄物博搜の成果が光る短編。

坪井美樹「助動詞の語形変化と活用形——中世後期を中心として——」〔日本語と日本文学〕6）ラウの已然形ラウメ、サウの已然・命令形サウへ、マイマジイ、ベイベシイ、ウズ・ウズルについて、様々の語形とそのゆれを、「語形を縮約させつつ無変化助動詞化しようとする動き」と、それに抵抗する「活用語尾保存の欲求」という二つのベクトルの合一として解釈しようとする、魅力的な論。短編のせいか用例が少なく、説得力を十分に発揮しえていないうらみがある。

蜂谷清人「鷺保教本と『狂言』とは——『云権古伝』の記述をめぐって——」〔国語論究〕1）十七、八世紀にかけて生存した鷺保教の古伝の記述から、他流との比較、同流の他の伝本との比較などを通して、ス・デス・スイ・ヲリヤレ・出ル・見ウ・仰・シマセ・シメ・デ御座ルなどについて、史的観点から記述したもの。手なれた書きぶりである。

小川栄一「指定のニアリとニテアリとの対立——下接助動詞の傾向より考える——」〔国語国文学（福井大学）〕25）断定表現の形式として、

標題の両形が共存した時期の資料の一つ今昔物語集を対象に、下接助動詞から傾向を考えたもの。明解は得がたいと思われたが、二千の用例の精査で、ニアリの優勢な打消など、ニテアリの優勢な過去などと整理し、その意味を、うける語句の素材的内容の既定・非既定で分れると解釈する。この使い分けにテ、がいかなる役割を果すのかなど、次の課題が多い。

柳田征司「上代東部方言の性格」(『愛媛大学教育学部紀要』第11部19) 後半は、上代東部方言の文法面の指標としてナフをとりあげ、東歌・防人歌をいねいに解釈することで、これが打消の継続を表したとするもの。これは、柳田が構想する壮大な日本語音韻史の一篇で、文法事象の項目に入るはずのものだが、その位置づけがわたしにはまだよく分らない。

北島徹「助動詞『けり』の意味と表現性——記紀歌謡・万葉集を資料として——」(『宮地論集』) 万葉集の公的な歌七十七首にはケリが用いられないのはなぜかという問から、ケリは「個人的発見・認識」の意味と、それを「告知」する表現性がある、と述べる。小松光三のいう、文法と解釈との違いを自覚した論である。

三 テンス・アスペクト・ムード

福島邦道「山岸源氏における助動詞『けり』——学説史の中で——」(『実践国文学』32) 前期の鈴木泰の「『き』『けり』の意味と学説史」の遺漏を指摘しながら、山岸徳平の説を学説の流れの中で捉え直した、これも鈴木木のに劣らぬ労作である。福島は、キ・ケリともにテンスを表すと見ているが、山岸の説(思惟の助動詞とする)の紹介が主目的で、自説は詳しく述べていない。

鈴木泰「テンス」(『国文学解釈と鑑賞』51—1) 落窪物語の、心中詞を含む会話文の終止用法に限って動詞のテンスを考えたもの。アスペクト的な完了・未完了の違いをキ・ケリの最も基本的な違いと考え、ムード的な違いはそれから発生するものと考えた前稿を訂正し、事実は逆であつて、認識の直接性・間接性というムードの方が本質的で、アスペクトの違いはそれにまつわつて現れると考えるべきだとする。また、ケリを未完了アスペクトを表すとしたこと誤りだったとする。

同「古代日本語の過去形式の意味」(『松村論集』) 右の論を他の表現にも広げて述べたもの。アオリスト的な過去を表す形式としては、キとテンス的な用法のケリがあり、ペルフェクト的な過去を表わす形式としてはツ・ヌ・タリ・リがあるとする。会話文ではムード的用法が多いが、この傾向が顕著な状態動詞をうけるものについての前稿の説明を撤回するなど、鈴木の見解はゆれており、まだかなりの部分での修正が予想される。

同「古文における六つの時の助動詞」(『講座』2) 源氏物語前半の会話文肯定形の終止用法で考えたもの。結論は右と同じだが、読者の広がりを考えてか、用語を一部変えているのはかえつて誤解を招かないだろうか。

糸井通浩「王朝女流日記の表現機構——その視点と過去・完了の助動詞——」(『国語と国文学』64—11) 標題が示すように日記の表現論的考察だが、鈴木とは逆に、かげろふ・和泉・紫式部の三日記の、地の文の文末用法を扱う。その文法的意味への言及は少ないが、ケリがムード性をもつとし、ツにも一種のムード用法を認める。紙幅の関係か、用例のあげ方が不十分だと思ふ。

柳田征司「近代語『テアル』」(『愛媛国文と教育』19) 古代語のテアリがタリを経て近代語のタに変るが、近代語のテアルはいかにして成立したかを考え、古代語テアリの生き残りが復活したのだと結論する。テアリを劣勢ながらも生きのびさせたのがテ侍リ・ニテアリだったという興味ぶかい解釈を示す。

こまつ ひでお「ひくらし」(『文藝言語研究 言語篇』12) 「ひくらしのなきつるなへにひはくれぬとおもふはやまのかけにそありける」について、「多重表現」とみずから称する課題を論じた一編。その18〜24節で、助動詞ツ・ヌ・ケリの意味を論じ、「同じく〈完了〉と呼ばれているが、ツは辞書の意味における完了であり、又は *perfect* の訳語としての〈完了〉であるといつてよさそうである。」という著者の意図が正しく理解されるか、わたしは不安である。

近藤明「助動詞「つ」「ぬ」の否定法・接続法・中止法」(『山形女子短期大学紀要』18) 従来指摘されてきた標題のような形式が古代の文献に乏しいことの意味を統計に基づいてアスペクトの観点から考えようとする試みである。

この領域は、万華鏡のようにわずかの角度の違いで景観が大きく変ることを、特に痛感させられる。どの角度が最も安定して美しい景観を呈するか、多彩な研究が期待される。

四 構 文

この領域では、新旧さまざまな方法による研究が見られた。

柳田征司「古文における連用格」(『講座』3) 構文法を中心に日本語文法史をどのように捉えうるか、との問題意識に立ち、うなぎ文の由来と、「私は水が飲みたい」という形式とを論ずる。著者の一

貫した史観による解釈が快い。

小川栄一「疑問文が連体形に終止することの意義」(『福井大学教育学部紀要 第一部』36) 本居宣長以来の課題、疑問詞疑問文における連体形終止と終止形終止の違いの由来を考えたもの。主に談話文法の前提と焦点の観点を入れて、疑問文の表層構造を、不定・未定・確定・判定の各部分に分けることで、文末が確定のときは連体形終止、判定または未定のときは終止形終止になると結論する。万葉歌の解釈において阪倉篤義の論文を見ていないなどの問題もあるが、有益な論である。

北原保雄「『行ふ尼なりけり』考——その文構造と意味——」(『日本語と日本文学』7) 源氏物語若紫の巻の著名な一節「のぞき給へばただ此の西面にも持仏すゑ奉りて行ふ尼なりけり」には、主題・主格が示されていないことから、類似の表現を分析して、変形文法の分裂文にならないこの型は、「尼なりけり」が話し手の評価・判定の表現であつて、「行ふ」を準体法と解釈するたちばをとる。句読点のない文献でそれをいかに判別したのだろうか、音読との関係は、など疑問が多い。

竹田純太郎「『終止なり』の考察——上代の用例を中心として——」(『国語国文』55—12) 終止形承接のナリは伝聞・推定の意味を表わすと断定しがちな学界の傾向に挑んだもの。時代を限って考察すべきだとし、上代の用例から文法的特点七項をとりだして検討し、終止ナリは助動詞相互承接の枠からはみだしていることなど、論の前半は新見が快調に示される。持続のアスペクトと発見のムードを担うとする後半は不透明に感じられた。解決すべき点が多い。

中村幸弘「終止形に付く「なり」と「めり」」(『講座』2) ナリの

学説史を述べながら、はつきりとナリ別語説に立ち、視覚的推定のメリとの対比・交渉を描く。ナリ論争の経過が簡略すぎないか。

五 助 詞

大野晋「ハとガの源流」(『国語と国文学』63—2) 現代語のハとガ

の談話的な特性の由来を考える、一連の研究の一編。七つの係助詞を、疑問詞(未知の情報)をうけるシ・ゾ・カと、それをうけないハ・コソ・ナム・ヤとに二分できることを述べ、亡びてしまったシ・ゾの役割を、今日のガが果しているという発見を提出する。大野の研究のまとまる日は遠くなさそうだ。

京極興一「接続助詞『から』と『ので』の史的考察——小学校国語教科書を対象として——」(『国語と国文学』63—6) 四十五年間にわたって採られた教材、浦島太郎と白兔の説話を主対象にすえた着眼がおもしろい。ユエ・カラが競合するところにノデが成立し、大正中期にノデ優勢となって今日に至る過程が明らかになった。著者は慎重だが、近年はまたカラが優勢なので、その推移の日本語史における意味を試解としてでも示してほしかった。国語読本の資料性についての発見も有益である。

小林賢次「大蔵流狂言台本における逆接条件表現——トモドモからテモ・ガへの推移——」(『国文学言語と文芸』99) 虎明本と虎寛本の表現を、天草本平家・伊曾保と対比し、計数処理に基づいて、狂言本の方が一歩進んだ状態にあること、虎寛本の近世的な性格の強さなどが明らかにされる。接続助詞ガの判定について石垣謙二の規準を用いながら、それへの不満を述べている。わたしも卒業論文でそのことを書いており、同感である。

中野伸彦「洒落本における助詞『の』」(『松村論集』) 化政期の江戸語に、ノは上↓下、ネは下↓上と、待遇上の使いわけがあったとされる。それに先だつ明和〜寛政期では、ノ必ずしもそんなになく、ネとは相対的な差にすぎないと主張する。その相対的な差を人々がいかに意識していたかが知りたい。

六 敬 語

この領域での発表はさほど多くないうえに、(語彙)の担当者に讓るべきものもあり、五編にとどめる。

西田直敏「宣命の文章構造と敬語表現」(『松村論集』) 別に「自敬表現研究史」(『甲南女子大学研究紀要』22・23)をまとめて自説を位置づけた著者が、通説に反対して、口勅にはもちろん、その他の宣命にも、天皇自身の立場や個性の反映が見られると主張する。また、後代の「新儀式第四」に、自敬表現を用いるべき規定のあることを指摘する。細部には異見が出されるかもしれないが、有益な論である。

近藤泰弘「敬語の一特質」(『築島論集』) 前稿「用言の敬語法」(『研究資料日本文法』9)を発展させ、ユク・クの尊敬語と謙讓語が、なぜオハス・マキルに単一化されるのかという問題を、視点の導入で解こうというもの。論述は汎時論的・普遍文法的である。自己同一化の視点と敬意の視点とが同じ機能をもつと解釈し、授受動詞をも説明しようる点にこの原理の魅力がある。

清瀬良一「天草版平家物語に見られる口訳語の諸相——『平家物語』の尊敬動詞を視点にした場合——」(『国語国文学報』43) 例えば宣フが問ハルル・言ハルル・仰セラルなどと口語訳され、かつ近接して類義の

動詞を併置する例の多いことを、日本語教科書としての目的意識の所産と解釈し、オハスが行く・出ツルなどに対応することは、尊敬表現の簡素化と見ている。後者については、日本語の分析的表現への志向とわたしは見たい。

同「天草版平家物語の謙讓動詞——「孝る」の類について——」（同、44）前稿と対になる形の論。既に本書を対象に二十余の論文を書いているのに、謙讓の要素が消去される傾向について解釈を保留するのは、ものたりない。

森野宗明「依頼・懇請と助言・忠告の発話描写について」（『日本語学』6—7） 標題の表現のナムヤ・コソクメなどについて、平安時代の社会背景をふまえて述べた、著者得意の領域の短編である。

七 用言・語構成

こまつ ひでお「袖ひちて」（『言語文藝研究 言語篇』12）古今集歌の解釈の方法を考える道すじを、紀貫之の一首について実践したものの。言及は多岐にわたるが、主眼は動詞ヒツによる派生関係とその解釈にある。終りには、自動詞の期待される場所に他動詞が用いられる現代語の例を援用して解く。すみずみまで配慮のゆきとどいた行文に酔わされる。

近藤政美「天草版平家物語における『銀箔を』において』の解釈をめぐって」（『名古屋大学国語国文学』59） 標題の本文について、橋本四郎は置キテのイ音便としたが、平家諸本の調査などから、押イテでありえたことを論証する。橋本はサ行四段動詞のイ音便全体を描こうとして調査が粗かったので、この反証は有効だが、橋本のたてた非音便の原則にはずれて、押スに音便化の力が存しえた原因につ

いては言及がない。

矢島正浩「近松世話浄瑠璃における形容詞連用形のウ音便化について」（『国語学』147） 本誌掲載論文なので内容の紹介は省く。北原保雄・甲斐睦明の用いた方法に則り、従来の漠然とした認識を実証したことになるが、本誌は、少しくらい荒さがあっても新しい視点による研究に紙面をさくべきだとわたしは考えている。

玉村文郎「古代における和語名詞の疊語について」（『宮地論集』最近へ日本語教育指導参考書）の『語彙の研究と教育』上下を著わして大きな貢献をなした著者が、『古典対照語い表』と平家・今昔の索引から、和語の名詞・代名詞の疊語を集めて、主に意味論的な考察を加えたもの。複数の意味について教わるころが多かった。

山口佳紀「シヅ（賤）遡源」（『国語語彙史の研究』7） 万葉集に見える之津乎の表記への疑問から出発して、これをシツツイラと分析して名詞シを析出する。そして、シヅムなどの語基シヅ／シダとは異なるものと考えようとする。大胆な発言なので論議を呼びそうだ。わたしも別稿を予定している。

蜂矢真郷「縮重複・一部重複続考——合わせて工藤氏に対して述べる——」（『万葉』124） 副題にあるように、わたしの旧稿「古代日本語における疊語の変遷——イトドからイトイトへ——」（『万葉』122）への批判がかなりの紙幅を占める。その評価は第三者にゆだねるのがいいだろう。

八 その他

以上の各項に収まらまいものや、広い領域にわたるものを一括して掲げる。

山口堯二「疑問表現の推移」（『宮地論集』） 疑問表現について、根

元的・総合的な考察をすすめている著者が、推移をたどることで原理を考えたもの。係り結びの退化に象徴される、文構成に情意的なものとの関与する傾向が薄れ、論理化の方向にそって変化したと見る。

同「疑問表現と感動語・呼掛語・応答語」(大阪大学教養部研究集録 人文・社会科学 35) 右と同様に、疑問詞を中核とする成分だけの一語文的表現において、感動語以下に転じていくくみを汎時論的・意味論的に考察する。本来その疑問表現に備わっていた表現性や働きが局限化し、一部だけが残存する変化、とまとめている。

諸星美智直「国語資料としての帝国議会議事速記録——当為表現の場合——」(国学院大学大学院紀要 文学研究科 17) 明治二十三年から翌年にわたる会期の半分を対象にした考察。その前提として、速記録の検討に多くの筆が費される。論は、田中章夫の研究との対比により、その異同の由来を考えることが中心。衆議院と貴族院とで傾向が異なることもあり、資料性に配慮すべきことが述べられる。むしろ、標準語の形成過程をたどるのに有効だとわたしは思う。

白藤禮幸「平安朝初期宣命の国語史上の一、二の問題」(築島論集) 六国史のうち、日本後紀から三代実録までの四書の、広義の宣命について、史的観点から語彙・語法を粗描した。確かに統紀宣命に比べて陽の当らなかつたものである。

佐藤亨「近世初期の待遇表現(二)——「醒睡」を中心——」(新潟大学国文学会誌 30) 会話文の第一・二人称代名詞を、ロドリゲス・コリヤードの記述と比較して記述・整理したもの。語彙の論とも見られるが、代名詞と述部との呼応という視点をを用いるところに、文法の論としてのおもしろさがある。

渋谷勝己「可能表現の発展・素描」(『日本学報』5) 可能表現と

いいうる形式全体を、通時的・通所的にとらえようとする長編。資料としても有益で、この領域の基本的な論考になるであろう。

『国文法講座4』から二編を紹介したい。

山口仲美「伊勢物語の文法」 定家の写した天福本を、異系統の本と対照することによって、文法事象から本文の性格を考えた、その応用のしかたがおもしろい。

山口明穂「源氏物語の文法」 この道に造詣の深い著者が、源氏読解の要諦を文法の点から述べたもの。ただ、三のウの記述はたいそう回りくどく、例えば「疎まれた相手」に対する「疎んだ相手」という表現はわたしには理解できない。20ページ冒頭三行は読み誤りではないだろうか。

九 おわりに

われわれの学問をいかに規定するかは、本来研究者各自の責任に属することだろうが、今回、本稿をなすにあたってわが学会の規定を見たら、「国語学会は国語研究の進展と連絡を図ることを目的とし、広く全国の国語の研究者および国語に関心を持つ人々を会員とし云々」となっている。わたしはあえて規定どおりに展望の対象を設定したが、これはおちこぼれの隠れ *hidden* たる(いな、もはやたりしとすべきか)わたしのせめてもの逆説である。この規定と学会名がいかに実態から離れた偏狭なものであるか、万人の認めるところであろう。早急に変更すべきである。

右のほかに展望の対象としなかつたのは次のようなものである。例えば「経験的 or 直観的」といった表現をするもの、これなどはわたしの美意識がうけつけない。また、自分の師匠に対して、論の中

で先生と呼んだり、稿末で謝辞を述べたりしたものも、お、お、お、お、除いた。これは内々では自然な表現だが、外に向けては日本の敬語の用法にもとると考えるからである。ただし、何某博士何とか記念に寄せられた、当の博士に敬意を表するものは別である。紙幅の超過や不足を弁解したものも除いた。それはメモであつて、公表すべきものではない。与えられた紙幅で書き直すべきものだからである。

本稿のためにわたしの手もとに寄せられた抜刷のたぐいはわずか十八。それでも目にふれた論考は二百に近い。という、多作の二年間であつたことになるかもしれないが、多作必ずしも豊作ならず。かく言うわたし自身が駄作しか書いていないので、これは自責をこめての感想なのだが、その原因はとくと考えてみなくてはなるまい。

今期、講座と記念論集の刊行が相次いだ。月刊の商業誌も何点かある。研究者の多くがそちらに力を奪われたということもあるのだろう。それに、群立するサブ学会・ミニ研究会・同人集団が、それこそ三人寄ればぶあつい論集を売り出すということも影響しているのだろう。わが師濱田敦は、かつて「タダの原稿を書け」ということを一度ならず発言している。その言葉の意味するところは単純ではないが、わたしは反芻して己れを戒めている。